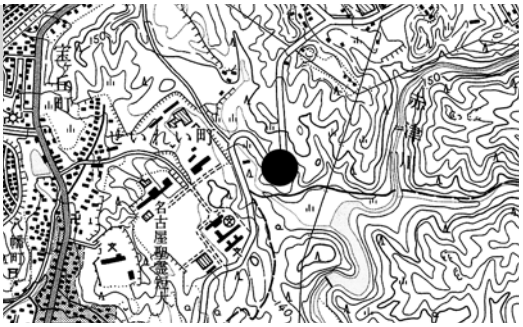
若宮（わかみや）1号墳（ごうふん）

所　在　地　瀬戸市若宮町一丁目
(北緯35度12分14秒、東経137度6分45秒)
調査理由　道路改良工事国道248号
調査期間　平成18年9月～平成19年3月
調査面積　270㎡
担　当　者　小澤一弘・早野浩二



調査地点（1/2.5万「瀬戸」）

立地と環境　若宮1号墳は、矢田川右岸の丘陵上に立地する。周囲の丘陵には高塚山古墳群、塚原古墳群、山口堰堤古墳群が分布する。若宮1号墳は丘陵頂部よりからやや下降した傾斜地に築造される。付近の標高は、約140mである。現状において、同一の尾根筋に古墳の分布は認められない。

墳丘　墳丘の遺存状況は良好でなく、盛土もその多くがすでに流出していた。周溝も検出されなかったが、墳丘の南東から東斜面の裾にかけて外護列石が部分的に残存していたことから、古墳は径約9.5mの円墳であることが明らかとなった。現状における墳丘の高さは約1.5mで、墳丘西側と北側は丘陵斜面に連続する。墳丘周辺からは、6世紀末?7世紀初頭の須恵器高杯が出土した。

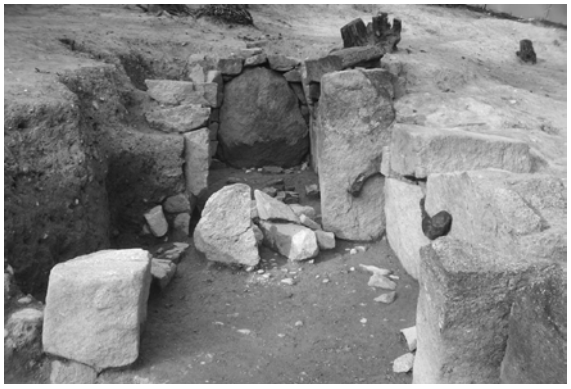
横穴式石室　古墳の埋葬施設は横穴式石室で、調査前からすでに奥壁と側壁が露出し、周囲には大型の石材も散在していた。横穴式石室はS-12°Eの方向に開口する全長5.4mの擬似両袖型石室である。天井石はいずれも原状を留めていなかったが、玄門と羨門の立柱石が原状、あるいはそれに近い位置で検出された。横穴式石室に使用された石材は全て、付近に産出する花崗岩である。

玄室は長さ約3.2m、幅約1.2mで、平面形はほぼ長方形である。玄室床面には礫床としていた礫が散在する。玄門付近は礫を積み上げて閉塞されていた。羨道は長さ約2.0m、幅約1.2mで、平面形はほぼ長方形である。羨門の立柱石は外護列石に接続する。玄室内において古墳に関連する遺物は出土しなかったが、羨道からは、7世紀前半の須恵器平瓶、瑯が破砕されたような状態で出土した。また、玄室床面付近には中世陶器や炭化材が残され、羨道床面付近は被熱していた。これらは、中世の段階に横穴式石室が再利用されたことを示すものである。

まとめ　調査の結果、若宮1号墳は、径約9.5mの円墳であることが明らかとなった。古墳が築造された時期は、墳丘の周辺から出土した須恵器から、6世紀末～7世紀初頭と考えられ、羨道から出土した須恵器は、7世紀前半まで追葬が行われた可能性を示唆する。古墳の埋葬施設は、周辺の古墳群に多く認められる擬似両袖型の横穴式石室で、羨門までを含めた全体的な平面形状を明らかにできた成果は特筆される。これらの調査成果は、古墳の立地と分布、築造時期と利用期間、墳丘の外部施設と横穴式石室の構造等を比較検討する好材料となるものである。（早野浩二）

若宮１号墳平面図（S=1:200）

全景



横穴式石室

玄室

羨道

閉塞状況

玄室床面